

小学校の特別支援学級における体育的活動の成果に関する研究

—— これまでの実践のレビューを通じた検討 ——

東海林沙貴¹⁾ 根本 想²⁾

A Study about the Outcome of Physical Activities in Special Needs Class in Elementary School:

Through a Review of Previous Implementations

Saki Tohkairin So Nemoto

Abstract

In Japan, special needs education had started in 2007. The number of students in special needs class in normal school has been increasing in these days. The purpose of this study is to clarify the outcome in physical education classes and physical activities in special needs class in elementary school through prior work. As a result, (1) changes in physical or technical aspect, (2) changes in emotional aspect, (3) changes in communication skill or social aspect, and (4) changes in cognitive aspect were founded. Further research about the problems of practices in physical activities in special needs class would be needed.

Key words: special needs class, physical activity, elementary school

キーワード：特別支援学級，体育，小学校

I. 研究の背景

わが国では、2007（平成19）年4月から「特別支援教育」が学校教育法に位置付けられた。「特別支援教育」においては、障害のある子どもたちの自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、一人ひとりの教育的ニーズを把握した上で、子どもたちの持つ力を高めて、生活や学習上の困難を改善又は克服させるため、適切な指導及び必要な支援を行うことが目指されている（文部科学省，2007）。

なかでも特別支援学級は、知的障害者、肢体不

自由者、病弱者及び身体虚弱者、弱視者、難聴者、言語障害者、自閉症・情緒障害者を対象とし、そのような障害を持つ児童生徒が障害による学習上又は生活上の困難を克服するため、通常の小学校あるいは中学校に設置される（文部科学省，2020）。本研究では、そのような特別支援学級における体育的活動¹⁾に着目する。

鈴木・佐藤（2009）は、特別支援学級に在籍する児童の多くが、交流学級の体育授業に参加しているものの、その目的は、通常学級の児童との交流にある場合が多く、そのような場面においては、特別支援学級の児童が学習内容を理解したり、彼

1) 吉川市立美南小学校

2) 育英短期大学現代コミュニケーション学科

らに適した条件の下での運動量の確保あるいは運動能力の向上には十分につながっていないと述べ、特別支援学級での体育授業の重要性を指摘している。

しかしながら、特別支援学級での体育的活動を対象とした調査・研究は乏しい。実際、論文検索データベースの「Cinii」を用いて「特別支援 AND 体育」を検索すると、345 件の文献がヒットするものの、検索ワードを「特別支援学級 AND 体育」とすると、ヒットするのは 34 件のみである（2020 年 12 月 13 日現在）。この結果のみで、特別支援学級での体育学習に関する研究の乏しさを一概に結論づけることは尚早であるが、指標の一つとして参考にはなるであろう。

一方で、特別支援学級での体育的活動に関する研究あるいは論考が皆無というわけではなく、それらの実践から得られる知見は重要であろう。

そこで本研究は、特別支援学級においてこれまでに行われてきた体育的活動の実践をレビューし、それらの成果を明らかにすることを目的とする。

近年、特別支援学級に在籍する児童生徒の数は増加傾向にあり、専門性のある教員の不足や、多岐にわたるニーズに対する支援を行うための人員の不足が問題とされている（窪田，2019）。「特別

支援教育資料（平成 29 年度）」（文部科学省，2018）において、特別支援学級の設置数や在籍する児童生徒数の増加傾向について小学校と中学校を比べると、若干ではあるが小学校の方がその傾向が大きいことがわかる²。そこで本研究では、小学校での実践を対象としたレビューを行うこととする。

II. 方 法

論文検索データベース Cinii において「特別支援 AND 体育」をキーワードとして先行研究を検索し、ヒットした 345 件の文献から、学会発表のための抄録及びセミナーやシンポジウムの内容を記述した文献、また、入手の困難だった文献を除外し、レビューの対象を小学校の特別支援学級での実践のみに絞った。そして、先行研究が参考にしていた文献のうち、先の検索にヒットしなかった 1 編を加えた 9 本を本稿でのレビューの対象とし、それらにおいて述べられている成果と課題について整理した。なお、特別支援教育が開始されたのが 2007（平成 19）年であることから、文献は 2007 年以降のものを扱うこととした。対象とした文献を表 1 に示す。

表 1 本研究の対象文献

寺坂	2018	カキーン！と打って イッテ T!! ：特別支援学級でのベースボール型ゲームの実践
山本	2016	朝から身体を動かし鍛え、こころもからだも整えよう!! ：特別支援学級（情緒）の楽しい運動あそび
池田ら	2016	知的障害児のトランポリン跳躍姿勢の変化 ：特別支援学級における体育授業を通して
原	2014	特別支援学級児童の情緒・行動のコントロールにおけるマット運動の効果
長曽我部	2011	小学校特別支援学級児童の投動作の向上に関する研究
石丸	2010	領域・教科を合わせた指導 『わくわく体育』と『わくわく生活』
浪岡	2009	特別支援学級の表現 コミュニケーションの広がり求めて ～知的障害特別支援学級での実践～
新田・結城	2007	みんなで伸びあう楽しい授業 活動を大切に音楽・体育

Ⅲ. 結 果

1. 技能面や身体面での変化

池田ら (2016) は、知的障害児を対象とした器械運動の授業においてトランポリンを実施し、その実践の前後で跳躍姿勢に変化があったことを明らかにしている。特に、膝関節と体幹を真っ直ぐに保つことができるようになり、その傾向は運動の得意・不得意に関係なくみられたことが述べられている。

原 (2014) では、1 学期及び 2 学期の間に、週に 1 回のマット運動の授業を 6 回ずつ実施した実践を行っている。意図的に身体をコントロールする経験を積ませることにより、注意の持続が困難だった児童の情緒や行動のコントロールが可能になった事例、言語発達や社会性の向上に繋がった事例、また、自尊心の低かった児童に自尊心の向上が見られた事例から、特別支援学級におけるマット運動の効果を述べている。技能の向上が研究の主な目的ではないものの、身体のコントロール能力の向上が確認できたといえる。

長曾我部 (2011) では、投動作の向上を目的とし、児童 6 名を対象としたバトンスロー教材を用いての実践を行っている。その結果、投動作及び投距離が向上したことが明らかになっている。特に、児童が個々に有する課題に対して教材の追加及び修正を 3 点行った後に、大幅に技能の向上が認められたことが述べられている。

模倣の上達についても、新田・結城 (2007) や、浪岡 (2009) によって述べられている。新田・結城 (2007) は、体育授業の始めに準備運動として取り入れている音楽に合わせたエアロビクスを通して、対象の児童が、当初全くできなかったステップや、手足の多様な動きを習得したことを報告している。そして、そのような模倣が上達するにつれて、楽しさの実感や運動量が増加したという。また、浪岡 (2009) は、「うみのなか」と題された表現リズム遊びの単元を通して、子どもたちが

海の生き物を想像しながらその動きを真似したり、周囲の友達や教師の動きを真似しながら体を動かすことができるようになっていったと報告している。さらに浪岡 (2009) は、子どもたちが動きにくい動き、例えば左右非対称の動きや静止することなどを、あえて教師から要求することで、多様な動きが可能になっていったと述べている。

新田・結城 (2007) では、跳び箱運動の実践についても報告されている。個々の課題に合わせた場の設定や、グループ編成を行うことで、児童が少しずつ目標をクリアでき、跳び箱の技術習得につながったことが述べられている。

2. 情緒面での変化

山本 (2015) は、情緒学級において毎朝実施している 25 分間の体育的活動の内容と、その実施の効果について述べている。校庭での実施の際には、3 種類の鬼ごっこや固定器具を使った運動、及びランニングを行い、室内のホールで実施の際には、長縄跳びや感覚づくりの運動、輪踏み跳び、及びランニングを行っているという。継続的な実施による顕著な成果として、ある児童の「『キレたトラブル』『言うことを聞かないモード』が無くなってきたこと」(山本, 2015, p.39) と、別の児童が「動けるようになってきたことと『徘徊的脱走的プチ行方不明』が無くなったこと」(山本, 2015, p.39) の 2 点を挙げている。

先述したように、原 (2014) では、身体をコントロールする経験を積ませたことにより、情緒や感情のコントロールが可能になったり、自尊心の向上がみられたことが明らかにされている。

また、運動での楽しさの実感については、新田・結城 (2007)、浪岡 (2009)、山本 (2015) において言及されていた。

3. コミュニケーション能力や対人関係での変化

寺坂 (2018) は、可能な限りシンプルにしたベースボール型ゲームの実践を通して、単元の後半に

は児童同士が協力し合うプレイが見られるようになったと報告している。この実践の際には、競い合う場を焦点化するとともに、児童同士のやりとりに教師や介助員が適度に介入したという。

また、先に述べた原（2014）においても、マット運動の授業における技能面での向上が、社会性の向上につながったことが報告されている。

4. 認知面での変化

先にも述べた寺坂（2018）では、ベースボール型ゲームの実践において、ゲームや用具の簡略化及び、競い合う場面の焦点化により、児童がゲーム状況を自ら判断し、意思決定をできるようになっていたことを報告している。

石丸（2010）では、領域・教科を合わせた「わくわく体育」と呼ばれる実践が報告されている。「わくわく体育」では、ストレッチ・準備運動、ボールやロープを使った運動、走行ムーブメントが取り入れられ、意図的に身体を動かすことの基本を学習させるとともに、聞く力や理解力の向上が目指されている。石丸（2010）では、児童の変化について明確には述べられてはいないものの、実践が継続的に行われていることから、それらの力に変化があることが示唆されているといえよう。

IV. 考 察

本研究で対象とした文献からは、特別支援学級での体育的活動において、技能面での変化、情緒面での変化、コミュニケーション能力や対人関係での変化、認知面での変化の4点が主な成果として挙げられていることがわかった。

特別支援学級での教育は、通常学校の学習指導要領に沿って行われることが基本となるが、児童の実態に応じて特別の教育課程の編成も可能である。本研究からは、特別支援学級の担当教員が、例えば、基礎的な体力が不足していたり、自分自

身の感情のコントロールが苦手である等、対象の児童の実態に合わせ、題材となる種目や教材を選んだり、授業のねらいを設定していることがわかった。加えて、ルールの簡略化や適切な場の設定、用具の活用、ならびに教員の適切な指導や介入によって、運動への興味関心を喚起し、楽しさを感じさせたり、飽きさせないような工夫は不可欠であるといえよう。

障害種やその程度、さらには、学年も様々であることの多い特別支援学級においては、児童一人ひとりが積極的に参加できる体育的活動を実践していくことは容易ではないと考えられる。しかしながら、通常学級よりも、例えばルールの理解に時間を要したり、身体運動や協調的な動作を苦手としたり、あるいは、他者とのコミュニケーションが苦手な児童の多い特別支援学級において、それらの工夫はより一層授業の成否に関わってくるといえよう。程度の差こそあれ、特別な支援を要する児童が通常学級に在籍している場合も多く、このことに鑑みても、上述した特別支援学級における体育授業の工夫や視点は、通常学級での授業づくりにおいても重要であると考えられる。

加えて本研究のレビューからわかったこととして、特別支援学級を対象とした先行研究の乏しさも挙げられる。レビューの対象として取り上げた論稿は、その多くが実践の報告にとどまっていた。先述したように、特別支援学級の教育は通常学級の学習指導要領に沿って行われること基本とされるものの、児童の実態に合わせた教育課程の編成も可能である。そのような点で、学習内容が曖昧になることも多いといえよう。さらに、障害種や程度にも差があったり、交流学級の体育授業への参加の有無にも差があるため、実践の内容を類型化したり、実践内容と成果の関係に何らかの法則性を見出すことは難しいかもしれない。しかしながら、特別支援学級に在籍する児童生徒の増加や、それに伴う専門教員の不足という現状に鑑みても、より精緻なデータをもとにした実践や、その研究

が必要であると考えられる。そのためには、体育を専門とする教員ならびに研究者が、特別支援教育にこれまで以上に携わり、児童生徒の多様なニーズに応えようとしていく姿勢が必要であろう。

V. まとめ

本研究では、小学校の特別支援学級での体育的活動の実践をレビューし、これまでの実践における成果として、(1) 技能面や身体面での変化、(2) 情緒面での変化、(3) コミュニケーション能力や対人関係での変化、(4) 認知面での変化の4点が、主な成果として報告されてきたことが明らかとなった。

本研究では、特別支援学級での体育的活動における課題については言及できなかった。これまでの実践において発生した問題や、解決できなかった課題にフォーカスすることで、より効果的な実践を提案できるであろう。したがって、特別支援学級での体育的活動の実践における課題の整理について、本研究の今後の課題としたい。

注

- 1 先行研究では、朝の活動に体育的な活動を取り入れている事例や、領域・教科を合わせた事例もあった。そのため、特別支援学級において授業として行われる「体育」だけでなく、様々な活動や学習が含まれるよう、「体育的活動」という表記で示す。
- 2 2007年と2017年の学級数及び児童生徒数について、小学校では、学級数は26,290学級から41,864学級に(約1.59倍)、児童数は78,856名から167,269名(約2.12倍)に増加した。中学校では、学級数が11,644学級から18,326学級に(約1.57倍)、生徒数は34,521名から68,218名(約1.97倍)に増加した。

引用・参考文献

長曾我部博(2011) 小学校特別支援学級児童の投動作の向上に関する研究. 障害者スポーツ科学. 9(1): 15-24.

- 原朋希(2014) 特別支援学級児童の情緒・行動のコントロールにおけるマット運動の効果. 自閉症スペクトラム研究. 12(1): 47-53.
- 池田千紗・安井友康・金澤恵美・平山一馬・中嶋秀一・松田岳大・山本理人・千賀愛(2016) 知的障害児のトランポリン跳躍姿勢の変化: 特別支援学級における体育授業を通して. 北海道教育大学紀要 教育科学. 67(1): 125-133.
- 石丸恵理子(2010) 領域・教科を合わせた指導「わくわく体育」と「わくわく生活」特別支援教育研究. (639): 21-23.
- 窪田知子(2019) 学校基本調査・特別支援教育資料にみる特別支援学級の現状と課題. 障害者問題研究 47(1): 2-9.
- 楠見友輔(2016) 日本における障害児と健常児の交流教育に関するレビューと今後の課題. 特殊教育学研究. 54(4): 213-222.
- 文部科学省(2007) 特別支援教育の推進について(通知). https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07050101/001.pdf. (2020年12月13日確認).
- 文部科学省(2020) 2. 特別支援教育の現状 学びの場の種類と対象障害種. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/002.htm. (2020年12月13日確認).
- 浪岡千恵子(2009) コミュニケーションの広がり求めて～知的障害特別支援学級での実践～. 女子体育. 51(6): 14-19.
- 新田江美子・結城玲子(2007) みんなで伸びあう楽しい授業—活動を大切にした音楽・体育(2007) 特別支援教育(603): 38-43.
- 鈴木啓子・佐藤慎二(2009) 小学校特別支援学級の体育学習に関する調査—実践上の課題と今後の方向性の明確化を目的として—. 植草学園短期大学紀要 10(0): 97-105.
- 寺坂民明(2018) 「カキーン!と打ってイッテT!!」～特別支援学級でのベースボール型ゲームの実践～. 女子体育 60(6・7): 40-45.
- 山本繁(2016) 朝から身体を動かし鍛え, ころもからだも整えよう!! : 特別支援学級(情緒)の楽しい運動あそび. 女子体育. 57・58(12・1): 34-39.

(2021年1月26日受理)